

〔論文〕

乳児保育のテキストにみる保育士間の「連携・協働」に関する分析的研究

永井 久美子
Kumiko Nagai

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻

本研究では、保育士養成科目である「乳児保育」のテキストにおいて、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」がどのように取り扱われているのかを明らかにし、その分析を通して、保育士養成の「乳児保育」の授業において、学生たちに何を伝えていく必要があるのかを整理することを目的としている。その結果、以下の7つの論点が記述されていることが見出された。

- ①子どもへの適切なかわりのために、種々の情報を速やかに確実に職員間で共有すること。
- ②報告・連絡・相談などのルールや、それらを情報共有するための体制づくりに関すること。
- ③子どもが安心して過ごすためには保育士間の連携が必要であること。その中で子どもと保育士の信頼関係が築かれていくこと。
- ④複数担任だからこそ、円滑な流れを作る方法や役割分担を検討する必要があり、誰が保育にあたっていても一定の質を維持するためにも「連携・協働」が必要であること。
- ⑤保育観を共有するために、「十分な相互理解と良好なコミュニケーション」や「カンファレンス」のような場面を通じた共通理解の場が必要であること。
- ⑥一人ひとり丁寧にかかわるためには、月齢差など個人差が大きいため、様々な情報を把握して、複数の目で確認することが大切であること。
- ⑦より豊かな保育を行うためには、チームプレイを意識し、日頃のコミュニケーションが大切であること。

以上のように、「乳児保育」のテキストは、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」について、情報共有を軸として、保育観の共有等を通してチームプレイで行うことが、一人ひとりへの丁寧なかかわりやより豊かな保育のために必要であることが示唆される。

キーワード：乳児保育 乳児保育テキスト 保育士間の「連携・協働」 保育観 複数担任

I 問題設定と本研究の目的

1 はじめに

近年、就労形態の多様化等社会の変化に応じて、様々な保育サービス（産休明け保育、延長保育、休日保育、一時保育等）が実施されている。また、保育所の需要も、女性の社会進出等による共働き世帯の増加とともに高まり、保育所の定員や入所児童数は年々増加し、とくに乳児保育へのニーズに対応した定員の増加や保育士の量的、質的確保が求められている。そのような状況は、様々な立場での保育士間の共通理解と「連携・協働」が必要になってきていることを示唆するものである。

また、保育施設の開所時間は11時間を基本にしながらも、大多数の施設ではそれ以上の時間が開所時間となっている。そのため、必要とされる人材の特徴として、とりわけ乳児保育においては子どもと保育士の数比が低く、複数担任体制の必要性が高く、保育の質の向上や乳

児保育を担当する保育士間の「連携・協働」が重要になってきていることを示唆するものである。

「連携・協働」は、「保育所保育指針」及び「認定こども園教育・保育要領」では、「保育士間」、「保育職員間」、「他職種間」、「保護者」、「地域」、「専門機関」等との「連携・協働」という文脈で、「保育の内容充実のため」、「健康・安全のため」等を目的として記述されているが、本研究では、乳児に関わる保育士間の「連携・協働」に着目する。多くの課題を抱える保育の現場に、保育士としての質の高い専門性を持って保育実践を展開するためには、保育士養成の必須課題として「連携・協働」に対する高い意識とそのことを実践できるスキルを育てることが重要になってきている。そのため、保育士養成校の学生には、先ず、配属されたクラスでの「連携・協働」のあり方に着目して伝えていく必要がある。乳児クラスは、複数担任であるがために、広い意味での「連携・協働」に限らず、チームとしてクラス体制の中

での「連携・協働」のあり方を整理する必要があると考える。

一方で、現場で求められる「連携・協働」の実践については研究が少ない。

また、保育士養成における保育の質の向上の視点に立った時、保育士間の「連携・協働」が実践においてこそ必須である。よって、保育士が行うべき「連携・協働」の具体的なありようを明確化する必要がある。

この明確化の手段のひとつとして、テキスト分析が有効と考えられる。これらのテキストは、主に保育士養成校で用いられるものである。この保育所保育指針改定をふまえた2018年以降の「乳児保育」のテキストを検討することにより、保育士養成校において重視しているであろう、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」への視点について明確化することができると思われるからである。保育士養成課程の必修科目である「乳児保育Ⅰ」は、保育所、乳児院等の児童福祉施設における3歳未満児の保育について学ぶ科目である。よって、本研究での「乳児保育」は、3歳未満児の保育を示すこととする。

本研究では、保育士養成科目である「乳児保育」のテキストにおいて、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」がどのように取り扱われているのかを明らかにし、その分析を通して、保育士養成の「乳児保育」の授業において、学生たちに何を伝えていく必要があるのかを整理することを重要な問題設定として提起したい。

本研究では「連携・協働」とは、必要に応じ、あるいは

は常に連絡を取り合って、協力的な作業を進めることと定義する。個々の保育者の能力や専門性に依拠するだけではなく、組織としての保育力を発揮し、共通の保育理念や保育観そして保育の内容、方法に関する共通理解に基づく連絡、協力の作業をすすめることによってこそ、保育や子育て支援に必要な専門性を保障することができる。

2 保育者養成校における「連携・協働」の授業内容

2017年3月の保育所保育指針の改定を受けて、保育士養成課程のカリキュラムの改訂があり、2019年度の入学生から適用されている。その内容として厚生労働省が示す「教科目の教授内容」に基づく「乳児保育Ⅰ」の目標と内容は表1の通りである。「乳児保育Ⅱ」の教授内容には、「連携・協働」が取り上げられていないため、今回の分析対象は、「乳児保育Ⅰ」の教授内容のみを取り上げている。ここで「乳児保育Ⅰ」の教授内容のみを取り上げるのは、分析対象とする「乳児保育」のテキストは、主に保育士養成校で用いられることを想定して編集されたものであり、基本的に「教科目の教授内容」の目標と内容を踏まえていると考えられるからである。「連携・協働」については、保育士養成課程科目全体の中で多面的に取り上げられることによって学生の学びは深まっていくものであるが、本研究では、「乳児保育」のテキストの分析を行うため、「教科目の教授内容」も「乳児保育Ⅰ」のみを取り上げることとした。

表1 2011年告示と2017年告示の比較

2017年告示 <科目名> 乳児保育Ⅰ（講義・2単位）	2011年告示 <科目名> 乳児保育（演習・2単位）
<目標> 1. 乳児保育の意義・目的と歴史の変遷及び役割等について理解する。 2. 保育所、乳児院等多様な保育の場における乳児保育の現状と課題について理解する。 3. 3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育の内容と運営体制について理解する。 4. 乳児保育における職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携について理解する。 ※「乳児保育」とは、3歳未満児を念頭においた保育を示す。	<目標> 1. 乳児保育の理念と歴史の変遷及び役割等について学ぶ。 2. 保育所、乳児院等における乳児保育の現状と課題について理解する。 3. 3歳未満児の発育・発達について学び、健やかな成長を支える3歳未満児の生活と遊びについて理解する。 4. 乳児保育の計画を作成し、保育の内容や方法、環境構成や観察・記録等について学ぶ。 5. 乳児保育における保護者や関係機関との連携について学ぶ。
<内容> 1. 乳児保育の意義・目的と役割 (1) 乳児保育の意義・目的と歴史の変遷 (2) 乳児保育の役割と機能 (3) 乳児保育における養護及び教育	<内容> 1. 乳児保育の理念と役割 (1) 乳児保育の理念と歴史の変遷 (2) 乳児保育の役割と機能

<p>2. 乳児保育の現状と課題</p> <p>(1) 乳児保育及び子育て家庭に対する支援をめぐる社会的状況と課題</p> <p>(2) 保育所における乳児保育</p> <p>(3) 保育所以外の児童福祉施設（乳児院等）における乳児保育</p> <p>(4) 家庭的保育等における乳児保育</p> <p>(5) 3歳未満児とその家庭を取り巻く環境と子育て支援の場</p> <p>3. 3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育</p> <p>(1) 3歳未満児の生活と環境</p> <p>(2) 3歳未満児の遊びと環境</p> <p>(3) 3歳以上児の保育に移行する時期の保育</p> <p>(4) 3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育士等による援助や関わり</p> <p>(5) 3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育における配慮</p> <p>(6) 乳児保育における計画・記録・評価とその意義</p> <p>4. 乳児保育における連携・協働</p> <p>(1) 職員間の連携・協働</p> <p>(2) 保護者との連携・協働</p> <p>(3) 自治体や地域の関係機関等との連携・協働</p>	<p>2. 乳児保育の現状と課題</p> <p>(1) 保育所における乳児保育</p> <p>(2) 乳児院における乳児保育</p> <p>(3) 家庭的保育等における乳児保育</p> <p>(4) 乳児や家庭を取り巻く環境と子育て支援の場</p> <p>3. 3歳未満児の発達と保育内容</p> <p>(1) 乳児保育における基本的な知識・技術に基づく援助や関わり</p> <p>(2) 6か月未満児の発達と保育内容</p> <p>(3) 6か月から1歳3か月未満児の発達と保育内容</p> <p>(4) 1歳3か月から2歳未満児の発達と保育内容</p> <p>(5) 2歳児の発達と保育内容</p> <p>4. 乳児保育の実際</p> <p>(1) 保育課程に基づく指導計画の作成と観察・記録及び自己評価</p> <p>(2) 個々の発達を促す生活と遊びの環境</p> <p>(3) 職員間の協働</p> <p>5. 乳児保育における連携</p> <p>(1) 保護者とのパートナーシップ</p> <p>(2) 保健・医療機関、家庭的保育、地域子育て支援等との連携</p>
--	--

3 研究の目的

本研究では、前述した問題設定に沿って、保育士養成科目である「乳児保育」のテキストにおいて、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」がどのように取り扱われているのかを明らかにし、その分析を通して、保育士養成の「乳児保育」の授業において、学生たちに何を伝えていく必要があるのかを整理することを目的としている。

II 乳児保育テキストに関する分析

1 分析方法

(1) テキスト一覧

分析を行うために引用したテキスト及びそれに加え確認したテキストは、以下の26冊である。

分析対象テキスト（2019年度新カリキュラムに沿ったもの）

A 阿部和子・大方美香（2019），乳児保育の理論と実践 [乳幼児教育・保育シリーズ] 光生館

- B 阿部和子（2019），改訂 乳児保育の基本 萌文書林
- C 茶々保育園グループ社会法人あすみ福祉会（2019），見る・考える・創りだす乳児保育Ⅰ・Ⅱ 萌文書林
- D 古橋紗人子・中谷奈津子（2019），シードブック 乳児保育Ⅰ・Ⅱ 建帛社
- E 星順子・片山智子（2018），乳児保育～子どもたちの四季 大学図書出版
- F 細井香（2019），保育の未来をひらく 乳児保育 北樹出版
- G 井桁容子・汐見稔幸（2018），ていねいな保育実践のために 保育の実践 フレーベル館
- H 入江慶太（2019），乳児保育一子ども・家庭・保育者が紡ぐ営みー【第2版】 教育情報出版
- I 神蔵幸子・金允貞（2020），やさしい乳児保育 青踏社
- J 加藤敏子・富永由佳（2019），乳児保育 一人一人を大切に 萌文書林
- K 小山朝子（2019），講義で学ぶ 乳児保育 わかば社
- L 松本峰雄（2019），乳児保育演習ブック [第2版] ミネルヴァ書房
- M 松本園子（2019），乳児の生活と保育（第3版） ななみ書房
- N 名須川知子・大方美香・馬場耕一郎（2019），乳児保

育 ミネルヴァ書房

O尾野明美・小湊真衣・菊池篤子 (2019), アクティブラーニング対応 乳児保育Ⅱ 萌文書林

P咲間まり子 (2018), 新版 乳児保育 大学図書出版

Q関根久美・山本智子 (2020), 乳児保育の基礎と実践 大学図書出版

R志村聡子 (2018), はじめて学ぶ乳児保育 同文書院

S汐見稔幸 (2018), ここまで見えてきた赤ちゃんの心の世界 0・1・2歳児からのていねいなほいく第1巻 フレーベル館

T汐見稔幸 (2018), 毎日の保育をより豊かに保育の基本 0・1・2歳児からのていねいなほいく第2巻 フレーベル館

U須永進 (2019), 乳児保育の理解と展開 同文書院

V高内正子・豊田和子・梶美保 (2020), 健やかな育ちを支える乳児保育Ⅰ・Ⅱ 建帛社

W谷田貝公昭 (監修) 中野由美子 (2020), 乳児保育Ⅰ 保育士を育てる⑤ 一藝社

X谷田貝公昭 (監修) 高橋弥生・中野由美子 (2020), 乳児保育Ⅱ 保育士を育てる⑥ 一藝社

Y寺田清美・大方美香・塩谷香 (2019), 新・基本保育シリーズ15 乳児保育Ⅰ・Ⅱ 中央法規

Z善本真弓 (2020), 演習で学ぶ 乳児保育 わかば社

(2) 26冊のテキストの概読と目次の分析

乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」に関する内容について、前述のテキストを概読する。そのうえで、保育士養成課程の必修科目である「乳児保育Ⅰ」のテキストの記述内容を分析する。分析に関しては、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」についてどのように記述されているかに着目し、2018年以降の「乳児保育Ⅰ」のテキストの目次から章・節・項ごとにキーワードを抽出し、分類を試みた。これらのテキストは、主に保育士養成校で用いられるものである。この保育所保育指針改定をふまえた2018年以降の乳児保育のテキストを検討することにより、保育士養成校において重視しているであろう、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」への視点について考察を行う。

考察の方法としては、2018年以降の「乳児保育Ⅰ」テキストの目次から、章・節・項に乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」についてどのように記述されているかに着目し、キーワードを抽出し、分類を試みた。川喜田(1967)のKJ法の手続きを参考にして、概念化した。KJ法は、まとめようもない複数多様なデータを、個人の思考だけでなく、複数人によって類似性や共通性のあるものごとにカテゴリー化し、これを繰り返すこと

で新たな意味や構造を理解する方法である。本研究では、次の手順で分析を行った。

1) グルーピング

記述の類似性や差異性に着目しながら意味の類似した記述をまとめ、具体的な内容を示す低次のカテゴリーを生成し、類似した低次のカテゴリーをまとめて、より抽象的な高次のカテゴリーを生成した。本研究では、最終的に最も抽象度が高い高次のカテゴリーを“大項目”とし、その下位に位置する低次のカテゴリーを“小項目”とした。

2) 分析の質の保証

本研究では、解釈の信頼性と妥当性を確保するために、保育方法を専門領域とする研究者1名の協力を得て筆者と2名で分析を行った。このことにより、分析の視点を輻輳化し、研究者間で解釈が異なった場合は、解釈が収束する点を検討した。そして、概念の整合性、さらに各カテゴリーの内容について解釈が一致するまで議論した。

2 7項目の分類基準の作成

(1) 分類の視点

「保育所保育指針」及び「保育所保育指針解説」で、乳児保育に関わる保育士間(職員間)の「連携・協働」について書かれている箇所をもとに分類の視点を検討した。

たとえば、「それぞれの保護者や家庭の状況を考慮し、職員間で連携を図りながら援助していくが、その際、常に子どもの最善の利益を考慮して取り組むことが必要である」というような「保護者・家庭の状況についての職員間の連携」や、「乳幼児期は疾病に対する抵抗力が弱く、容態が急変しやすいことを十分認識し、第3章で示されていることを踏まえ、職員間で連携を図りながら、適切かつ迅速に対応することが必要である」というように「疾病等に対する職員間の連携」が記述されている。また、「適切な役割分担がなされ、それぞれが組織の中での協力体制について明確に認識できるよう、必要に応じて指導計画に職員相互の連携についての事項を盛り込むことが求められる」というように「職員間の役割分担」についても記述されている。さらに、子どもとの関わりや子どもの遊びについては「子どもとの関わりにおいては、個に応じた関わりと集団の中の一員としての関わりを両面を大事にしながら、職員相互の連携の下、組織的かつ計画的に保育を展開するよう留意する」については、「子どもとのかかわりにおける連携・協働」や

「保育士等は連携をとりながら、子どもの生活のリズムに合わせてゆったりとそこにいることで、子どもも安定して遊び込むことができるようにし、子どもの欲求に応じて一緒に遊んだり、見守ったりする」というような「遊びに関わる連携・協働」について記述されている。そして、「この養護と教育に関わる目標は、子どもたちが人間として豊かに育っていく上で必要となる力の基礎となるものを、保育という営みに即して明確にしようとするものである。これらの目標を、一人一人の保育士等が自分自身の保育観、子ども観と照らし合わせながら深く理解するとともに、保育所全体で共有しながら、保育に取り組んでいくことが求められる」というように、「保育観の共有」については職員間の協働性の視点で重要なものであると記述されている。

このようなことを踏まえ、「乳児保育Ⅰ」のテキストの目次から章・節・項ごとにキーワードを抽出し、表2のように、7項目に分類する視点を整理した。

(2) 26冊のテキストに関して、表2のように7項目に分類できると考えられたため、この7項目の視点からテキストの記述内容を分類し、分析を行った。

Ⅲ 分析の結果

分析をした結果、26冊中22冊のテキストには「他職種間」「保護者」「地域」「専門機関」等との「連携・協働」について記述されていたが、特に保育士間の「連携・協働」については11冊のみに記述があった。そのため、この11冊のテキストを分析対象として分析を行う。7つの分類の視点の内容が11冊のテキストのどこに記述されているかを整理するために、表2に当てはめて分析を行うと以下の表3ようになった。

1 複数担任間での情報共有（家庭との連携の視点を中心に）

乳児クラス担当の保育士は、通常、複数の担任で保育を行っている。そのため、互いの情報共有は欠かせない。たとえば、「乳児保育の場合は、クラス内に二人以上保育士がいる。複数担任制であることが多いので、クラス内で連携をとることが必須になる」(テキストP)と複数担任だからこその連携について記述されている。そして連携するためには情報共有が大切であるため、「職員間で子どもの情報を共有しておくことが大切」(テキストK)、「職員同士が横のつながりを持ち、情報の

表2 乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」の分類の視点

大項目	小項目
1 複数担任間での情報共有（家庭との連携の視点を中心に）	家庭との連携
2 複数担任間での情報共有（連携体制の構築）	連携体制の構築、担任不在時、引き継ぎ
3 安心・安全及び愛着形成を意図した連携・協働	安心・安全、愛着形成
4 保育の流れを円滑にするための連携・協働（役割分担、生活の流れ）	役割分担、生活の流れ
5 保育観を共有した連携・協働	共通理解の場
6 一人一人にいていねいに関わるための連携・協働	複数の目で確認
7 より豊かな保育を行うための連携・協働	チームプレイ、日頃のコミュニケーション

表3 7つの分類の視点による分析結果

分類の視点	B	H	I	K	P	Q	R	U	V	Y	Z
1 複数担任間での情報共有（家庭との連携の視点を中心に）	○			○	○		○	○			○
2 複数担任間での情報共有（連携体制の構築）		○	○	○	○			○	○	○	
3 安心・安全及び愛着形成を意図した連携・協働	○	○	○							○	○
4 保育の流れを円滑にするための連携・協働（役割分担、生活の流れ）	○				○		○	○	○	○	○
5 保育観を共有した連携・協働		○				○		○	○	○	
6 一人一人にいていねいに関わるための連携・協働	○						○	○		○	
7 より豊かな保育を行うための連携・協働			○				○		○	○	

共有を図ったうえで実践していくこと」(テキストP)、「情報を速やかに共有」、「担当間で確実に共有」(テキストZ)というように、速やかに確実に職員間での情報を共有することの大切さが記述されている。

家庭との連携の視点での情報共有では、「保護者から子どもの体調でとくに注意する点、たとえば、下痢気味のため本日はミルクでなく、麦茶を希望する、お迎えに来る人の変更など、伝達事項を必ず確認しておくこと」(テキストB)、「一日24時間の生活の連続性を重視できるように家庭と園の連携を密にして、子ども一人ひとりの生活リズムを把握する。そのうえで担当保育者の援助の流れを確認し、担当する複数の子どもの生活の流れを構成する」(テキストB)等が記述されている。すなわち、その日の子どもの体調や生活リズム等では、保育士間でこれらを情報共有していなければ、子どもへの適切なかわりができないため、速やかに確実に情報共有する必要がある。その際、クラスの担当保育士だけでなく、パート職員もともに働くだけでなく、シフト制の勤務形態のため、「職員間の報告、連絡、相談など共通理解が非常に重要となる。シフト制、パート勤務の職員にも配慮し、朝の打ち合わせ時の内容を表にし、後から出勤した際に必ずチェックする。また、担当以外の園児についても把握できるよう、体調、発達の様子、それに合った関わり方等も午睡中に会議を設けて話し合う」(テキストU)というように、報告、連絡、相談や打ち合わせなどの必要性などについて触れたテキストもある。そのような体制が園の中にあることによって、「一人の保育者では対応しきれない内容であっても、複数の保育者が関わることによって、家庭との連携を密に取ることができ、結果として保育をスムーズに行うことが可能になってきます」(テキストR)と記述されているように、一人では対応が難しいことや保育をスムーズに行うことについて触れられているテキストもある。

その具体的な情報共有の手立てとして「ホワイトボード、ノート、パソコンなどを使用して可視化した内容は、必ず確認することを日常化する」(テキストB)のように情報を可視化することで共有しやすいが、「連絡ボードを活用する場合には、プライバシーの保護に留意する」(テキストZ)という記述のようにプライバシーにも留意する必要がある。

以上のことから、家庭との連携の視点を持った情報共有には、子どもの体調や生活リズム等、保育士間でこれらを情報共有し、子どもへの適切なかわりを確実にすすめていくという趣旨が基盤にあり、常に速やかに確実に職員間で情報共有する必要性が極めて高い。

2 複数担任間での情報共有（連携体制の構築）

近年の保育の現場は、多様化する保育業務や勤務の一層の多忙化という実態がある。そのため、情報共有をするためのルールや体制づくりを行っておく必要がある。「職員の人数が多い場合、速やかで正確な情報共有には施設長や主任を中心に情報の流れのルールを決めるといった組織化が欠かせない」(テキストU)、「保育所では、職員同士が集まって会議を開くことは、困難なことなので、互いが意識して、日頃からきめ細かく連絡を取り合う体制が求められる」(テキストP)と言うように、職員同士が集まって会議を開くことが難しい職場であるがゆえに、「施設長や主任を中心に情報の流れのルール」を決め、報告、連絡、相談や打ち合わせ等の体制が園の中にあることが必要である。

また、「アレルギーなどの慢性疾患、発達上の課題のある子どもなど、特別な配慮を必要とする子どもの保育においては、全職員が留意事項を共有し保育にあたることのできるよう、体制を整えておくことが必要です」(テキストK)のように、配慮を必要とするケースに対して、全職員が情報を共有するための体制づくりの必要性が記述されている。

保育士は、通常ローテーションの勤務体制になっていることが多いため、担当保育士が不在になることもある。その現状について「日中の保育についても、担任保育士が研修や休暇等の場合や、ローテーション勤務等により担任以外の保育士が保育にあたる場合が少なくない」(テキストI)、「担任間だけでなくほかのクラス担任やフリーの職員などとも連携しながら、時差勤務や休みの保育者の動きを補うことも、体制を維持していくために日常行われている保育方法である」(テキストY)と記述されている。

さらに、「11時間以上の保育を実施しており、クラス担任の勤務時間外には、他の職員が保育にあたります」(テキストK)と言うような現状がある。長時間保育の中では、多様な勤務形態の保育者がかかわる事から、「長時間保育の中では正規職員だけではなく臨時職員やパート職員も多いことから、ていねいに引継ぎをし、子どもが安定して保育の場で過ごすことができるようにしていくことが必要である」(テキストY)、「勤務を引き継ぐ際に保育場面での様子などを情報として共有するなど、保育者同士が連携して保育にあたる必要がある」(テキストH)と記述されている。

そこで、保育士が不在時の連携の重要性について「担当制をとる場合にも、担当不在時などに支障なく保育や保護者への対応ができるよう、日常的に職員間の細やかな情報共有が重要となる」(テキストV)、「行事の役割

分担や保育のカンファレンスなど、園運営には、保育者間のさまざまな形の協働が数多くある。日ごろのコミュニケーションや人間関係は、仕事の意欲にも大きく影響してくるので、重要なところである」(テキストY)と記述されている。さらに、配慮を必要とするケースに対して、全職員が情報を共有することの必要性が記述されている。

以上のことから、情報共有をするためのルールや体制づくり、報告、連絡、相談や打ち合わせ等の体制づくり、担任不在時の対応についての情報共有のための体制づくりが必要である。そのためには、情報の流れのルール・報告、連絡、相談や打ち合わせ等の体制づくりに取り組む必要がある。

3 安心・安全及び愛着形成を意図した「連携・協働」

保育所保育指針の「養護」の「情緒の安定」に示されているように、子どもが保育所内で安心して生活することが基本となるが、「保育者間の共通理解と連携がないと、子ども一人ひとりが安心して安全に過ごすことが難しくなる」(テキストB)、「保育者間で子ども理解を共有することができるとともに、クラスとして、施設として、一貫したかかわりをもつことができます。つまり、子どもが安心して保育所で過ごすためには、保育者同士の連携が欠かせないのです」(テキストH)と記述されているように、子どもが安心して過ごせるためには乳児保育に関わる保育士間の共通理解や連携が欠かせない。

このように安心して過ごすことが保育士との関係性を育む土台にもなるので、「担当保育者との関係性を土台としながら、ほかの保育者とも関係が広がっていくことで、子どもは多くの保育者から認められながら保育施設で過ごすこととなります」(テキストH)と記述されている。つまり、担当保育士との関係性を土台にして、他の保育士への関係が広がっていくためにも、保育士間の「連携・協働」は重要である。このことは、別のテキストIでも「担当保育士との愛着関係を築き、その信頼関係をもとに同じクラスのほかの保育士、隣のクラスの保育士というように少しずつ愛着の範囲を広げていく。毎日顔を合わせているからといって誰にでも同じようになつていくわけではない。乳児が大人に慣れることを急がせず、その子の成長・発達や個性に合わせてゆっくりと柔軟に対応してあげたいものである」と記述されているが、このテキストでは「保育者との愛着関係」という表現が用いられている。

しかしながら、関わる保育士の数が多いと子どもがそれぞれの保育士を認識できないこともあるので、「子どもは多くの職員と毎日接することになる。保育所にお

る子どもの長い1日を考えると、担当制でしっかりと一人の保育者との絆を築く必要があることに気づかされる。子どもの発達においては、担当の保育者との関係が重要であることはもちろんであるが、なるべく認識できる大人の数が多くなりすぎないこと。環境においても保育される集団が大きくなりすぎないことが重要になってくる」(テキストY)というように、集団規模の大きさについても記述されている。

さらに近年、「育児担当制」の保育が目ざされているが、「乳児保育においては、発達の基盤となるアタッチメントをしっかりと形成することが大切です。そのためには、細やかに欲求に応じてくれる特定の保育者の存在が不可欠です。一対一でのかかわりを中心とする食事・睡眠・排泄などの援助は、できるだけ担任保育者が対応できるような体制を整えましょう」(テキストZ)と記述されているように、愛着関係をしっかりと形成することが目的とされ、そのための体制づくりの必要性について記述されているものもある。

以上のことから、子どもが安心して過ごすためには「連携・協働」が必要であり、子どもは特定の保育者との関係性・愛着関係をもとに他の保育士等への関係を広げていくことに留意する必要がある。

また、「育児担当制」については、愛着関係の形成という観点で記されているテキストもみられたが、実際は、「ゆるやかな担当制」を採用する等、試行錯誤と工夫が続けられていることを読み取ることができる。

4 保育の流れを円滑にするための「連携・協働」(役割分担 生活の流れ)

保育では、一人ひとりの生活を大切にすることが重要である。保育所保育指針には、「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である」と記述されている。テキストVでは、「乳児保育の充実の視点からお互いに役割分担をして、生活の流れや保育の場での生活が快適なものになるように連携して保育にあたる必要がある」「クラス内の複数の保育者間で、援助の流れを確認し、生活時間のリズムを構成する」(テキストB)と記述されている。

また、テキストUでは、「保育所では、母親など1人の特定の大人が保育する家庭や担任制をとる幼稚園とは異なり、複数の職員が引き継いで保育が行われている。このため、保育士が入れ替わることとなり、こま切れの保育時間になりやすく、保育士が特定の子どもの一定の時間保育できない状況になりがちである。しかし、誰が保育にあたっていても一定の質を維持しなければ、十分な養

護ができない。そこで重要となるのが職員間の円滑な連携であり、その基本は情報の共有である」というように、複数の人がかかわる中にも、十分な養護が必要であり、誰が保育にあたっていても一定の質を維持する重要性についても言及している。また、乳児保育の円滑な流れをつくる方法として、「よりよい環境づくりや生活の円滑な流れをつくっていくためにも複数の職員や職種が必要である。そのため、乳児保育においては複数担任制をとっているところが多い。さらに、日中の保育ばかりでなく長時間にわたる保育のため、朝夕などの早朝・延長保育を担うパートの職員もいる。つまり、子どもは多くの職員と毎日接することになる。クラスとしては複数担任であるが、小グループに分割して保育を行う方法もある」（テキストY）というように、「小グループに分割して保育を行う」ことも例示されている。

さらに、役割分担の方法として、「明確に役割分担をすることによって、日々の保育の流れをスムーズに行っていきます」（テキストR）、「細やかに役割分担」（テキストZ）のように、明確で細やかな役割分担について記述されている。一方、「お互いの動きをよく見ながら、柔軟に役割を交代したり、補い合ったりすること」（テキストZ）、「事前に決められた役割にとらわれず、その都度、「子どもにとってどのような対応が最善か」という視点で、役割分担を確認し合います」（テキストZ）、「指導計画や事前の打ち合わせで、主な役割を決めておくことは基本であろう。それに応じて保育が営まれるのだが、打ち合わせ通りに子どもたちが活動するわけではない」（テキストP）、「目の前の子どもの様子や、その日の生活の流れで、臨機応変に対応することも大切である。そのとき、互いに声を掛けたり、メモや記録をこまめに取ったりすることで、連携体制を整えたい。そして、随時保育士たちが保育を振り返り、良かった点や改善点などを確認し、次の保育の実践につなげていきたい」（テキストP）のように、柔軟で臨機応変な役割分担を記述しているものもある。

以上のことから、十分な養護が求められるが、複数の保育士が関わる中で、誰が保育にあたっていても一定の質を維持するためにも「連携・協働」が必要である。たとえば、複数担任のもとで乳児保育の円滑な流れをつくる方法として小グループに分割して保育することが記されている。また、明確で細やかな役割分担を示す内容が示されている一方、柔軟で臨機応変な役割分担の必要性を記述しているものもある。

5 保育観を共有した「連携・協働」

乳児保育においては複数の保育士がクラスの子どもに

関わるが、前述の4で引用したように「誰が保育にあたっていても一定の質を維持しなければ、十分な養護ができない」（テキストU）というように、一定の質を維持するためには、保育や子ども、発達についての考え方や捉え方を共通理解していく必要がある。たとえば、テキストYには、「食事中にぐずって泣き出してしまった子どもに「食事を中断して寝かせよう」と考える保育者もいれば、「一定量は食べさせなければ」と考える保育者もいる」というように、食事場面一つとっても、考え方の違いで子どもへの対応方法が変わってくるので、一定の質を維持するためにも保育観の共有は大切なことである。そのため、テキストYの続きには「若い保育者であれば、ベテランの保育者に従うしかないと考えるかもしれない。保育観の違いを乗り越えるには十分な相互理解と良好なコミュニケーションが必要である。お互いの保育観を理解したうえで、「その子どもにとって最善は何か」について考えることが重要である」とお互いの保育観を理解する上で、「十分な相互理解と良好なコミュニケーションが必要である」ことが記述されている。

しかし、本来「いっしょに働かなければならぬ仲間であるはずが、気が合わない、仕事量に差があるなどさまざまな理由から人間関係にストレスを抱える保育者は少なくないのも現実である」（テキストV）と記述されているように、現実的には難しいことも指摘されている。

そして、「保育者も一人ひとりが、その立場や役割を有している（リーダーや中堅等）経験年数や小さな子どもがいるという私的な背景も含む。そして、それまでに培われてきた保育・教育観や育ってきた価値観など、それぞれが個性をもった一人の“わたし”という存在をつくっていることを意識した関わり合いとなるだろう」（テキストQ）、「誰一人同じ人間はいない。相手と自分との違いの中で“子どものため”のコミュニケーションの努力が必要になるということである」（テキストQ）と記述されている。そのため、「担任保育者がそれぞれの考え方で保育をしていると、子どもに混乱が生じる問題がある。そのため、保育の計画を共有し、配慮や留意すべき点についても十分話し合っておく必要がある。そこでそれぞれの保育者の保育に対する考え方（保育観）の違いが出すぎてしまうと、日々の保育に影響することになる」（テキストY）と記述されているように、「社会人として、保育専門職として、子どもの健やかな育ちのための保育の観点からよく話し合い、担任同士で意思疎通を図っていくことが大切である」（テキストV）と考えられ、乳児期に重要なことを丁寧に積み重ねる上で、乳児保育に関わる保育士間で保育観について話し合うことは大切であると示唆される。その方法として、テ

キストHでは、「複数の保育者が一貫性をもってかかわるためには、生活背景を含めた子どもの発達する姿を理解する「カンファレンス」のような場面を通じた共通理解の場を設ける」と言った工夫が記述されている。

以上のことから、保育士は、それまでに培われてきた保育・教育観や育ってきた価値観など、それぞれが個性をもった一人の“わたし”という存在であるので、一人ひとりの保育観が違うことを理解する必要がある。だからこそ、保育観を共有するために、「十分な相互理解と良好なコミュニケーション」や「カンファレンス」のような場面を通じた共通理解の場が必要である。そのことによって、保育士は子どもに対して一定の質を維持した関わりや、一貫性を持った関わりができると言える。

6 一人ひとりについていねいに関わるための「連携・協働」

乳児の発達や個人差に応じるためには、「保育を進めるうえで、個人差に対応したり、準備を前もってやっておいたりすることが不可欠になってくるからである。一人ひとりのペースを大事にすることや、子どもを待たせないための工夫が重要である」(テキストY)と言った一人ひとりのペースを大切にすることや子どもを待たせないための工夫が重要だと記されている。また、子どもへの関わり方について「一人の保育者が、ていねいに一人の子どもに関わるためには、複数の保育者がそれぞれの動きとクラス全体の動きを把握しながら行う必要がある、保育者間の共通理解と連携が不可欠となる」(テキストB)、「園児などの情報を共有することで、どの保育士が保育にあたっては一定の基準やその子に適した関わり方(応答の仕方)をすることで養護が達成できる」(テキストU)と記述されている。さらに、「子どもは発達する(=変化する)ので情報がすぐに古いものになってしまう点が挙げられる。特に乳児は発達が著しいので迅速かつ緊密な連携が必要となる。また、乳児は月齢差など個人差が大きいので園児数分の様々な情報を把握しなくてはならない点も挙げられる」(テキストU)と記されており、「1人で見ているだけでは気がつかない些細な事柄でも、複数の目で確認することによって事故を未然に防ぐことができたり、病気の兆候を早期に発見できたりすることがあります」(テキストR)というように、複数の目で確認することが、子どもの安全や健康を守る上で大切である事が記述されている。

以上のことから、一人ひとりのペースを大切にすることや、子どもを待たせないための工夫が重要である。複数の保育士がそれぞれの動きとクラス全体の動きを把握しながら行う必要がある。乳児は月齢差など個人差が大きいので、様々な情報を把握しなくてはならない。個々

の園児の情報を共有し、複数の目で確認することが重要である。

7 より豊かな保育を行うための「連携・協働」

より豊かな保育は、乳児に関わる保育士間の「連携・協働」があってこそ実現される。「複数担任であれば、それぞれの保育者が持っている能力を最大限に発揮することによって、相乗効果が出て、よりよい保育の展開が可能となります」(テキストR)、「ひとりで対応できないことも複数の保育士で補い合うことができる。それぞれの保育者が、もっている能力を最大限に発揮することにより、よりよい保育の展開が可能となる。また年齢月齢が小さいほど、安全に配慮する必要があり、複数の目で観察することにより、体調を崩すなどの変化も早期に発見できる。新人保育士の場合には、中堅保育士と組んだ場合など、知識や経験から多くを学ぶことができるであろう」(テキストV)と記述されている。このように、それぞれの保育者が持っている能力を最大限に発揮できるような「連携・協働」がなされると、よりよい保育の展開が可能となる。また、「保育者間では、どのような仕事をいつだれがどのようにして行うかを話し合い、工夫している。また、子どもへの対応や援助についても担任間で話し合い、それぞれの視点や保育観などを出し合いながら、子どもにとっての最善を決めていく。そうした意味で保育は「チームプレイ」である。あらかじめ決めておいたことでなくても、日々の保育では臨機応変が求められる。日ごろのコミュニケーションを土台に、声を掛け合い、信頼し合ってチームプレイは成り立つ」(テキストY)、さらに、「一貫性をもった保育につながるだけでなく、保育者同士が表情豊かにコミュニケーションを取り合い、協力して保育にあたる姿は、子どもにとっては「人とかかわる」姿のモデルとなります」(テキストI)と記述されている。そのため、よりよい保育を行うにあたっては、役割分担や互いのサポートなどが必要となり、テキストIでは、「子ども自身の自尊感情も高まります。保育者同士で協力する姿は、人とかかわる力の育ち、社会性の発達、子どもの自尊感情に影響するのです」と記述されている。

以上のことから、より豊かな保育を行うためには、「チームプレイ」を意識することが大切であること、チームプレイが上手くいくには、日ごろのコミュニケーションが大切であることが示唆される。また、協力して保育にあたる姿は、子どもにとっては「人とかかわる」姿のモデルとなるであろう。

IV 総合的考察

1 保育士養成の「乳児保育」の授業への示唆

(1) 乳児保育のテキスト類から得られた論点

乳児保育のテキストを表2の7項目の視点に基づいて記述内容を整理していくと、大きくは下記の7つの論点が記述されていることが見出された。

- ①子どもへの適切なかかわりのために、種々の情報を速やかに確実に職員間で共有すること。
- ②報告・連絡・相談などのルールや、それらを情報共有するための体制づくりに関すること。
- ③子どもが安心して過ごすためには保育士間の連携が必要であること。その中で子どもと保育士の信頼関係が築かれていくこと。
- ④複数担任だからこそ、円滑な流れを作る方法や役割分担を検討する必要があり、誰が保育にあたっていても一定の質を維持するためにも「連携・協働」が必要であること。
- ⑤保育観を共有するために、「十分な相互理解と良好なコミュニケーション」や「カンファレンス」のような場面を通じた共通理解の場が必要であること。
- ⑥一人ひとり丁寧にかかわるためには、月齢差など個人差が大きいため、様々な情報を把握して、複数の目で確認することが大切であること。
- ⑦より豊かな保育を行うためには、チームプレイを意識し、日頃のコミュニケーションが大切であること。

まずは、①②に示されているように「情報共有」の視点をもった「連携・協働」のための体制づくりが必要である。これは、子どもへの適切なかかわりのためには、速やかに確実に職員間で情報共有する必要があるからだとと言える。

次に、③④に示されているように「子どもが一日の生活を安心して過ごせる」ための「連携・協働」が大切である。これは、複数の保育士が関わり、十分な養護が求められる中、誰が保育にあたっていても一定の質を維持するためだと言える。

そして、⑤に示されているように、複数の保育士が関わり合いながら子どもと関わっていく職場だからこそ「保育観の共有」のための「連携・協働」が大切である。これは、保育士が子どもに対して、一定の質を維持した関わりと一貫性を持った関わりを行うためだと言える。

最後に、⑥⑦に示されているように、「一人ひとり丁寧に関わり、より豊かな保育を行う」ための「連携・協働」が大切である。これは一人ひとりのペースを大切にすることや、子どもを待たせないための工夫だと言える。ひいては、協力して保育にあたる姿は、子どもにと

っては「人とかかわる」姿のモデルになると言える。

(2) 前述の論点を保育士養成の「乳児保育」の授業に生かすには

保育士養成課程のカリキュラムにおいて「乳児保育 I」の教科目の教授内容では、「4.乳児保育における職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携について理解する」という目標のもとに「4.乳児保育における連携・協働」という内容が示されている。その具体的なものとして「(1) 職員間の連携・協働」「(2) 保護者との連携・協働」「(3) 自治体や地域の関係機関等との連携・協働」について取り上げる必要がある。本研究では、職員間の「連携・協働」のうち、とくに同じクラス内の保育士間の「連携・協働」について着目することにより、総合的考察の冒頭に示した7つの論点が得られた。

そこで、同じクラス内の保育士間の「連携・協働」について、これら7つの論点に沿い、とくに学生が具体的に理解し実践しやすい方向、たとえば以下のような内容を順次学んでいけるような教示を行いつつ、すすめていくことが望ましいと考えられる。

第一に、同じクラス内の保育士間の「連携・協働」の必要性について考えることが大切である。乳児クラスの子どもの情緒の安定や一人ひとり丁寧にかかわるためには、一人ひとりの保育士としても大切なことであるが、そこに関わる保育士が連携して関わる必要がある。そのため、前述の「③子どもが安心して過ごすためには、保育士間の連携が必要であること。その中で子どもと保育士の信頼関係が築かれていくこと。」、 「⑥一人ひとり丁寧にかかわるためには、月齢差など個人差が大きいため、様々な情報を把握して、複数の目で確認することが大切であること」について伝えるとともに、学生が、③、⑥が示す保育を展開する中での「連携・協働」への理解と実践の必要性や必要感について、考える機会があると良いであろう。

第二に、より豊かな保育を行うためにはコミュニケーションが重要であることに気付き、考えることである。そのため、前述の「⑦より豊かな保育を行うためには、チームプレイを意識し、日頃のコミュニケーションが大切であること」や「⑤保育観を共有するために、十分な相互理解と良好なコミュニケーションやカンファレンスのような場面を通じた共通理解の場」といった、⑤、⑦が示すコミュニケーション環境を重視した「連携・協働」への理解と実践について考えることが必要であろう。一人ひとりの乳児に関わる際、保育士によってかかわり方の違いが生じることはやむを得ないが、より豊か

な保育を行うためには、保育観が共有され、日頃のコミュニケーションが豊かで、チームプレイが意識されていく必要がある。そのため、授業においてビデオ教材やエピソード事例などを通して、「こんな場合はどう関わればいいだろう？」とグループ・ディスカッションをする等して、共通理解の必要性や自分の保育観に意識を向ける等の機会があると良いであろう。

第三に、保育士間の情報共有の方法やその必要性について考えることである。そのため、前述の「①子どもへの適切なかわりのために、種々の情報を速やかに確実に職員間で共有すること」や「②報告・連絡・相談などのルールや、それらを情報共有するための体制づくりに関すること」を伝えていく必要がある。これらはいわゆる「ホウ・レン・ソウ」と言われるものであるが、朝受け入れたときの保護者からの情報や、保護者から質問されたことなどを聞いた保育士だけが情報を把握していれば良いのではなく、それらを互いに情報共有するための報告・連絡・相談の必要性や具体的な方法や手立てについて、学生たちが知恵を出し合い考える機会があると良いであろう。

第四に、複数担任間での役割分担等の実際について考えることである。前述の「④複数担任だからこそ、円滑な流れを作る方法や役割分担を検討する必要がある、誰が保育にあたって一定の質を維持するためにも連携・協働が必要であること」は、チームで保育をしていくためにも必要であり、誰が保育にあたって一定の質を維持するためにも「連携・協働」が必要であることを伝えていく必要がある。①、②、④が示す保育士間の具体的な「連携・協働」への理解と実践の必要性や自分の役割に意識を向ける等の機会があると良いであろう。

2 より豊かな保育を行うための「連携・協働」のあり方

最後になるが、保育士養成校における乳児保育のテキストから見出された論点をもとに保育の現場への提案を行いたい。前述のように「乳児保育Ⅰ」のテキストにおいては、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」について、情報共有を軸として、保育観の共有を通してチームプレイで行うことが、一人ひとりへの丁寧なかわりやより豊かな保育を行うために必要であることが示唆される。

しかしながら、「乳児保育における個別性と職員の協働性について」（菊池，2019）では、保育所保育指針の検討を行い、職員の協働に関わる記述として、「職員間の協力、協働は、いわゆる「引継ぎ」の場面に重要性が特化されているという感が否めない」「乳児保育において「個別性」とそれに応じる必要性は、保育所保育指針

において相当に強調されている一方、職員の協働性については、「担当が変わる場合の配慮」程度に記述があるのみである」と指摘している。つまり、保育所保育指針では、担当が変わる場合の配慮としての引き継ぎ場面において職員の協働が強調されているが、テキストにおいては、前述のように情報共有を軸として、より豊かな保育を行うための視点で記述がなされていることがわかった。

菊池はまた、「個別性への対応や応答的な保育のために協働性が発揮されるべきであるといった相関的な語られ方ではない。しかしながら、実際の保育、こと集団保育の場合においては、個別性に丁寧に応答的に配慮し、一人ひとりを大切にすることを保育を行うことにおいては、職員が協働性を発揮することが不可欠であると思えてならない」と指摘しているが、テキストを総合的にみると、この指摘の視点で記述がなされていることがみてとれる。

他方、実際の保育の現場の状況を鑑みると、保育士の業務については、近年、負担の大きさ、曖昧さ、多様性といった課題があり、組織としての保育の質を高めるマネジメントが一層求められている。保育士の職業領域においては、保育士不足にもかかわらず、早期に離職する率が高いという課題がある。また、正規・非正規の相違、経験年数の不均衡による円滑な勤務体制の確保が難しい等、保育の質、「連携・協働」にかかわる課題も多く見られる。

多忙化する一方の保育の現場において、「子どものことを話す時間がない」というのは共通した悩みであると考えられる。また、担任間で子どもの捉え方が違っていたり、対応が違っていたりすると、子どもは戸惑うだけでなく、保護者にも不信感を感じさせることに繋がると言える。その状況を解決するためには、複数担任の乳児クラスで話し合う時間が取れる体制づくり（必要なときにはほかの保育士が保育に入り、担任同士が話す時間を保障するなど）も園全体で考える必要がある。乳児保育に関わる保育士間で、相談や情報交換しあうなどの「連携・協働」を図りながら保育を進められるようになると、子どもたちは安定した気持ちで園生活を送ることができ、保護者に安心感が生まれると考えられる。このことは、ひいては園全体の落ち着いた生活・保護者との信頼関係にもつながっていくと考えられる。限られた時間であっても、他の保育士の力も借りながら、各クラスで話し合いの時間を作りだすように工夫する必要があると言える。短時間でも日常的に相談できる時間をつくるとともに、計画の作成や総括の機会を持ち、子どもの行動の捉え方、対応のあり方、保護者への支援について話し

合うことが非常に重要である。

また、個々の保育士の個性や能力を尊重しつつ、常に保育の目標や理念、方針が乳児保育に関わる保育士間で共通に理解され共有されることが重要である。「保育観」などを出し合いながら、子どもにとって最善の保育をすすめていくということは、すべての職員が同じように感じ、考え、行動することではない。共通する「保育観」があっても具体的なあらわれは多様であり、その多様性の「連携・協働」が集団の豊かさをつくると言える。さらに、保育士には、その時々状況に応じて自分で考え判断し、保育を創造していく力が求められる。自ら考える力を持つ保育士を育てるには、自律性を尊重し自由に考えられる環境を常に整え提供できることが必要である。保育士の自主性を尊重し、側面から支える事のできる園長のマネジメント能力が求められる。

3 本研究の課題と展望

先行研究として、Ciniiで「乳児保育」「同僚」「チーム」「連携」「協働」のキーワードで検索したところ、乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」に関する論文の数は、7件程度で少ないことがわかった。他方、今回の乳児保育のテキストにみる乳児保育に関わる保育士間の「連携・協働」に関する分析では、協働性を発揮するための記述が具体的に記されていた。むしろ、実践的な知見や大事にすべきことが実践知として「乳児保育Ⅰ」のテキストに記されている段階であると考えられた。

菊池(2019)の言葉を借りれば、「子どもの個性や個人差を複数の保育者がさまざまな視点で見ると、保育者同士が補い合いながら保育する協働性の両方が必要であると言えよう。」と、2つの意味での協働性が必要であるが、これは保育士が保育の質を高める上で、チームとして保育を行う重要性が指摘されていると言えよう。しかしながら、そのような協働性が園の体制として十分に機能していない園では、保育士の対人ストレスなどが多く、早期離職に繋がるケースも少なくない。このような保育士の「対人ストレス」がひどくなっている事例の多くは「保育観」の相違がネックになっていると言える。何冊かのテキストにおいても「保育観」の共有の視点が示されていたが、保育士養成の段階から学ぶ機会があることは、良いことだと考えられる。

また、保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会(2018)では、中間的な論点の整理の中で、「各保育所において「子ども」を中心に捉え、組織的に保育の質を確保・向上させていくには、職員が率直に語り合い、互いに支え学び合う関係性(同僚性)の下、園長がリーダーシップを発揮し、職員間の対話を通じて、

各保育所等における保育の理念を明確化することが必要である。その上で、そうした理念や現場の実情等に関する情報を園全体で共有し、個々の職員がそれらを念頭に置いて日常の保育に当たることが重要である。」と記されており、職員間の対話を通じた園全体での保育の理念・情報の共有を重ねていくことが、保育の質を支えすると明記されている。

今後の課題として、乳児保育のテキストの分析で明らかになった7項目の視点から保育の現場で調査を行うことによって、保育士養成校の教育として、具体的な保育士間の「連携・協働」について伝えていきたい。

なお、本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

V 文献・資料

文献

- 1) 菊池智子(2019). 乳児保育における個別性と職員の協働性について 教育学部紀要 文教大学教育学部, 52, 63-68.
- 2) 厚生労働省(2017). 保育所保育指針<平成29年告示> 株式会社フレーベル館
- 3) 厚生労働省(2018). 保育所保育指針解説 株式会社フレーベル館
- 4) 厚生労働省 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会 中間的な論点の整理, 厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/content/000516810.pdf> (2020年9月11日)

資料

- 1) 阿部和子(2019). 改訂 乳児保育の基本 萌文書林
- 2) 入江慶太(2019). 乳児保育—子ども・家庭・保育者が紡ぐ営み—【第2版】 教育情報出版
- 3) 神蔵幸子・金允貞(2020). やさしい乳児保育 青踏社
- 4) 小山朝子(2019). 講義で学ぶ 乳児保育 わかば社
- 5) 咲間まり子(2018). 新版 乳児保育 大学図書出版
- 6) 関根久美・山本智子(2020). 乳児保育の基礎と実践 大学図書出版
- 7) 志村聡子(2018). はじめて学ぶ乳児保育 同文書院
- 8) 須永進(2019). 乳児保育の理解と展開 同文書院
- 9) 高内正子・豊田和子・梶美保(2020). 健やかな育ちを支える乳児保育Ⅰ・Ⅱ 建帛社
- 10) 寺田清美・大方美香・塩谷香(2019). 新・基本保育シリーズ15 乳児保育Ⅰ・Ⅱ 中央法規
- 11) 善本眞弓(2020). 演習で学ぶ乳児保育 わかば社

付記

本研究は令和2～4年度科学研究費助成事業(基盤研究(C))「同僚性に困難を抱えやすい乳児保育担当者の

キャリア形成とバーンアウト」(研究課題/領域番号:
20K02695 研究代表者:永井久美子)の助成を受けて
行った研究成果の一部である。

“Collaboration and Cooperation” Among Infant Care Workers as Described in Textbooks on Infant Care

Kumiko Nagai

Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

In the present study, I clarified and analyzed how textbooks that were used in an infant care training course called Infant Care treated “cooperation and collaboration” amongst infant care workers. By doing so, I aimed at elucidating what the classes on infant care needed to communicate to students. The textbooks described the following seven aspects: 1) the need for staff members to ensure that they share various information in a timely manner to establish appropriate relationships with children; 2) rules regarding reporting, communicating, and consulting, as well as a system that enabled sharing such information; 3) the need for cooperation amongst infant care workers to provide children with a sense of security, enabling children and infant care workers to build trusting relationships among them; 4) co-caring in particular required the considerations of taking measures to ensure smooth workflow and task allocation, and cooperation and collaboration were necessary to ensure that the quality of care remains consistent regardless of who provided care; 5) the need for sufficient mutual understanding and good communication as well as opportunities such as conferences to foster common understanding to nurture shared perspectives on infant care; 6) the importance of grasping diverse information and confirming it amongst multiple staff members to provide individualized care and to address wide-ranging individual differences such as age in month; and 7) the importance of being aware of the value of teamwork and maintaining day-to-day communication in order to provide more well-rounded infant care.

As I noted above, on the topic of “cooperation and collaboration” amongst infant care workers, the textbooks for Infant Care indicated the need for teamwork that was based primarily on information sharing as well as shared perspectives on infant care in order to strengthen relationships with each and every child and to provide richer infant care.

Key words : infant care and education, infant care textbooks, cooperation and collaboration amongst infant care workers, perspectives on infant care, co-caring

